南アフリカにおける現地理解教育の実践

前ヨハネスブルグ日本人学校　教諭
兵庫県姫路市立家島小学校　教諭　矢　野　越　史

キーワード：ヨハネスブルグ，現地理解教育，JICA青年海外協力隊

1．はじめに

数年前，JICA青年海外協力隊現職教員派遣制度で南米にいる時，派遣先の国にあった日本人学校が閉校となり土曜日だけの補習授業校が誕生した。私はボランティアで補習授業校を手伝うことになり，海外で日本人子女が学習に関して不安な気持ちを感じ，不便な思いをしているということを知った。

そこで帰国後，海外で生活する日本人の子どもたちをサポートできたらとの願いから日本人学校の教員を目指し，平成20年度よりアフリカ大陸の南アフリカ共和国に赴くことになった。

2．南アフリカについて

(1) 世界一悪い治安

「ヨハネスブルグ駅に降り立つと200％犯罪に遭う」というインターネットの噂通り，南アフリカ経済の中心都市ヨハネスブルグは世界一治安の悪い街である。地元有力紙には「イラクよりも危険な街」として記事が掲載されるなど，自他共に認める凶悪都市ぶりである。

実際2009年に警察が発表した殺人事件18148件（1日当たり50名が殺人に遭っている）という数字を見ると背筋が凍る思いである。しかしこの凶悪犯罪は主に黒人居住区や市中心部ダウンタウン（アパルトヘイト時代は白人のビジネス街であった）で行われているため，市街地近郊に住む我々の身の回りで被害に遭った人はほとんどいない。逆に注意しなければならない犯罪は，カージャックやクレジットカードのスキミングなどである。

1990年代まで続いていたアパルトヘイト「人種隔離政策」はすでに撤廃されたが，経済的にはまだまだ白人の優位の状況にあり，一部の黒人（政府関係者など）以外は労働者階級から抜け出すことができない。そのため住んでいる地区も以前と同様，黒人は黒人居住区，白人は白人が住んでいた所と住み分けされている。

現在レインボーネーションというスローガンの下，全ての民族が差別なく暮らせるような国策が進められているが，現状はまだまだ理想に程遠い。一方で一部の黒人政治家がアフリカの村社会でよく見られる縁故主義による採用をし，しばしば専門的な知識が無い人が国営企業のトップに座り無謀な経営を行ったり，高額な役員報酬をもらったりということがあり，黒人間での貧富の差も問題になっている。また黒人居住区にアパルトヘイト後，他のアフリカ諸国から職を求め流入した移民（合法，違法を問わず）も増え，地元住民とトラブルになるケースが多く殺人事件にまで発展しているようである。

(2) 2010 FIFAワールドカップサッカー南アフリカ大会

先日サッカー女子ワールドカップがドイツで開かれ，「なでしこJAPAN」こと日本代表チームが優勝しワールドカップを手にしたことが記憶に新しいが，2010年には男子の大会が南アフリカ国内10都市で開催された。治安面から南アでの開催自体を心配する声もあったが，大会は見事成功しスペインが優勝した。

日本人が多く住むヨハネスブルグでは2つのスタジアムが会場となった。そのうちの1つはこの大会のために作

られた９万人以上の観客を収容するサッカーシティースタジアムで，決勝戦や開・閉会式が行われた場所である。行政上の首都があるプレトリア（立法の首都はケープタウン，司法の首都はブルームフォンテン）やヨハネスブルグからバスで２時間の日本代表が戦ったラステンバーグも会場の一つである。期間中は多くの日本人を含む外国人が世界最高レベルの試合を見に訪れた。この大会のために空港を近代化したり，空港から高級ビジネス街までを高速鉄道で結んだりと政府は国をあげての取り組みで観戦客やメディア関係者を安全にサポートしていた。

また全人口の80％を占める黒人の愛してやまないスポーツがサッカーであることも盛り上がった要因である。ラグビーやゴルフは白人，クリケットは白人やインド系，サッカーは黒人のスポーツと言ったスポーツの住み分けがある。地元リーグの観戦代を見るとサッカーは日本円で２～300円と安いのに対し，ラグビーは最低でも3000円前後と高額である。ここにもアパルトヘイト時代の悲しい名残があるようで，地元校に通う白人の子どもたちの中には，ワールドカップを見に行きたいけれど「親が許さない」,「親がサッカーは嫌いだから」といった理由で行けなかったようである。

(3) ヨーロッパと同じ

アフリカといえば灼熱，野生動物，裸で生活というイメージを持ちやすいが，南アフリカは全くヨーロッパの生活様式と同じである。都市の様子，ショッピングモール，学校など全て同じようであり，街並みも非常に美しい。大航海時代からヨーロッパ人の入植が進み，内陸部でダイヤモンドや金が発見されるとヨーロッパ人が大挙し，西洋の都市化が進んだのである。

住宅地では，家々の庭には芝生が青々と茂り，公園には美しい噴水があるのどかな風景が広がっている。この美しい様子だけを見ていると治安が悪い国だとは思えないようである。

ちなみに公用語は英語を中心に，アフリカーンス（オランダ系の言葉），ズールー語（黒人最大多数の部族）など11の言語が公用語として認められている。

３．現地理解教育の実践

(1) ヨハネスブルグ日本人学校

ヨハネスブルグ日本人学校はダウンタウンから約10分の植物園やエマレンシアダムがある閑静な住宅街にある。ダウンタウンから距離的にあまり離れていないということとカージャックが多いという点から，毎年新学年がスタートした翌日に，スクールバスの避難訓練をする。「強盗団がスクールバスを奪い，カージャックをする」という想定でバスから避難する練習を行っている。セキュリティー会社から講師を呼び，実際に音が出る銃を使うなど，かなりエキサイトするため，中には訓練中に泣き出す児童もいる。

そのような日本人学校であるが，平成20年度には45名ほどいた児童生徒は現在30名程度と，年々在籍数が減少する傾向にある。

(2) 大自然，長い歴史

南アを有名にしているものは大自然や歴史的価値のある遺産である。特に世界遺産として数多くの自然や文化が登録されている。そのひとつにスタークフォンテンの洞窟がある。ここは400万年前に住んでいたとされる人類の祖先が発見された場所である。日本人学校からスクールバスで１時間のところに位置し，遠足等で数年に１度利用する。またクルーガーナショナルパークも有名で，野生の動物が棲む広大な国立公園である。園内は自家用車で回

ることができるが，北の端から南の端まで行くには２～３日を要する。ライオン，チーター，レパードなどの肉食獣からゾウ，キリン，シマウマ，カバなどの草食動物まで様々な生き物を間近に見ることができる。ケープタウン周辺の大西洋には春先にクジラがやってき，浜辺にはケープペンギンが優雅に泳ぐ光景に出合える。ケープタウンはその昔，イギリスの植民地として栄えた歴史があり，現在でも近郊にはブドウ畑が広がり，地中海性気候をうまく利用したワイン造りが行われている。

これらの地域的特性をうまく授業に取り入れようと，学習発表会や普段の授業を通して教材研究を進めた。まず学習発表会では「オランダやイギリスの植民地」,「アパルトヘイトなどの歴史」,「サッカーワールドカップ」,「環境問題」,「伝統的な南アの遊び」などについて調べ，子どもたちが劇をすることで見ている人にわかりやすい発表をした。

授業の実践としては南アの動物絵本を読んだり，南アかるたの作成をしたり，新聞のちらしを利用して算数の計算をしたりと身近なものを授業に取り入れる工夫をした。音楽ではゲストティーチャーとして教会の方を学校に呼び，ゴスペルを歌ってもらった。初め子どもたちは静かに観賞していたが，徐々にアカペラに魅了され一緒に歌い踊るようになった。体育ではタッチラグビーやクリケットを少人数でもできるようにルールをアレンジしたり，ワールドカップにちなんだ持久走大会をしたりと興味がわくような取り組みをした。家庭科などでは南アのレシピで南ア伝統の料理を作るなど，すべての教科において現地理解を意識した教材の開発を行っていた。

(3) 現地交流と英語教育

ヨハネスブルグ日本人学校は現地との交流にも力を入れている。年間３回以上に及ぶ現地小学校との交流会では英語を使って日本の文化を伝えたり，一緒にゲームを楽しんだりした。現地校への訪問ではプレサッカーワールドカップを開き試合もした。

来校時や訪問時にはお互いの教師が事前に打ち合わせをしっかりと行い，子どもたちがより深く交流できるよう日本人と南ア人のペアで行動できるような内容にするなど，工夫をした。

その他にも現地の老人ホームへの訪問や遠足，校外活動（４回）などを通して現地の方と交流をした。

子どもたちの中には英語が得意で自らコミュニケーションを取ることができる子もいるが，そうでない子も多い。英語力の向上が保護者からの要望としても多い。そこで日本人学校では２名の現地採用の英語講師を雇い，学年を２つのクラスに分け，習熟度に応じた授業を行う形態をとり，子どもたちの英語（英会話）レベルの向上に尽くしている。少なくとも毎日，英語講師の授業がある時間割を組み，英語に慣れ親しめる環境を作っている。また休み時間にも英語学習に取り組むことができるように，リスニングルームを整備し，ＣＤラジカセを利用した聞き取りの練習も行っている。

(4) 青年海外協力隊とのつながり

数年前より，南アに派遣されているJICA青年海外協力隊の隊員との交流会を日本人学校で実施している。隊員に活動の紹介をしてもらい，一緒に国際協力について考える機会となっている。そこで児童生徒会が中心となってまだまだ使えるが自分たちにはいらなくなったおもちゃや文房具などを協力隊員を介して地元の保育園や幼稚園に贈るという企画が実行された。贈呈式をした後，「隊員に手渡した荷物はどうなったんだろう」と子どもたちは少し気にかけている様子であった。

後日隊員が再来校した時に，そのおもちゃや文房具がどうなったかという報告があった。ビデオを見た子どもたちは「自分のおもちゃを楽しそうに使っている」などと身近に国際協力に貢献できたことを喜んでいた。

海外に縁あって住んでいる子どもたちが，自ら「困っている人がいる時に何ができるんだろう」と考え，実行できたことは非常に有意義であったと考えられる。

４．おわりに

派遣期間中の３年間を通して，非常にいい経験をしたと感じている。優秀な同僚の仕事に対する姿勢や実践方法など見習うべきことは多かった。ずっと南アフリカで研究してきた現地の素材を使った現地理解教育の教材開発は，今後日本の現場でもさらに実践しようと考えている。

算数の計算などではすでに南アの折り込み広告を利用し授業を行っているが，今後は外国語の授業において南アを紹介しながら，子どもが興味を持って目標に向かえるような楽しい授業を進めたいと考えている。

教師として自分のスキルアップにつながる３年間の在外研修に参加させていただき感謝の心でいっぱいである。ヨハネスブルグ日本人学校の子どもたちによく「南アは好きですか？」と質問をすれば，みんな「大好き」「自然があり野生動物がいるので好き」と答えていた。

私自身が経験した南アフリカという国のイメージは世界一治安の悪い国ではあったが，「もう一度行ってみたいか？」という質問にはもちろん「YES」と答える。幼い娘を連れての生活だったので，娘が大きくなってから今一度訪問したいと考えている。

公私ともに我々を支えてくれた南アの人々に大変感謝している。